

三村松(広島) 150年の歴史を振り返る

5月28日、今年150周年を迎えた三村松(三村邦雄社長)は広島市内のアステールプラザで「吉本新喜劇&バラエティーショー」を開催し、約2000名のお客様・関係者が150周年を迎えた三村松の歴史の瞬間を共にした(39面参照)。

三村松の創業は慶應元年。当時、台屋町と呼ばれていた現在の広島市南区京橋町に住んでいた「三村屋」嘉助が、斜屋町(ちぎやちよう)、現在の広島市中区堀川町で、副業としての仏壇仏具の商いを始めたのが三村松の歴史の始まりだ。

二代目三村元次郎の時代に、副業であった仏壇

仏具の製造卸が本業となる。元次郎(もとじろう)は、孤児を引き取って育てるなど社会奉仕家であり、「ほとけもと」とも呼ばれていた。

三代目三村松次郎は三村松の中興の祖であり、三村松の業容を拡大し、広島を金仏壇の一大生産地へと育てた。現在の三村松の社名は、三村松次郎の名前をとったものである。

四代目三村繁己の時代は、原爆投下、終戦、そして戦後復興の時代である。1945年8月6日に米軍機から投下された原子爆弾は広島市内を壊滅させ、三村松は店舗を

失い、繁己も自宅を失った。繁己はその日の早朝、大竹市に向いており原爆の難はのがれたのだ。店舗と自宅を失ったなか廃業も考えたが、多くの職人さんの再興への願いを受け、逆境を奮奮材料に気力を奮い起こし、ゼ口からの再出発に立ち向かった。終戦後は十年以上、毎年8月6日に線香無料奉仕を行った。

五代目で現社長の三村邦雄の時代は発展と基盤強化の時代である。

三村邦雄氏は1970年に慶應義塾大学を卒業と同時に三村松に入社する。そして入社と同時に吉島工場を建設。吉島工場では自社職人七人の他に、仏壇製造未経験者13人を採用し、仏壇の製造工程を細分化することで、未経験者でも自分が担当する工程の熟練度を高めるシステムを採用し、金仏壇量産へのノウハウも生み出す。

吉島工場の製造能力だけでは需要に追いつかず、三村邦雄氏は学生時代に買い付けの経験のある鹿児島県川辺に向き、1973年に工場を建設する。この工場では最初から65名を採用でき、増加する需要に応えるようになるが、工場建設にあたって四代目繁己は大反対であった。



平成9年5月9日
平山郁夫美術館にて
平山画伯・平山館長とご一緒に
左側が三村松・三村邦雄社長
(お仏壇を納入したご縁にて)

鹿児島工場オープンにより、三村松は金仏壇製造本数において日本でも有数の存在となり、1979年にはトップに立ち、以来今年で36年連続金仏壇製造日本一となっている。

量産型の仏壇にも品質の高さ、デザイン性の高さを貫く「三村松イズム」は貫かれていくが、そのベースとなっているのが、広島吉島工場で製造される伝統的工芸品の仏壇だ。

2013年に開催された「第21回全国伝統的工芸品仏壇仏具展」には出展六本中五本が「中小企業庁長官賞」などの各賞を受賞。

今春開催された「第22回全国伝統的工芸品仏壇仏具展」では出品11本中、5本が「経済産業省商務情報政策局長賞」などの各賞を受賞した。

前回は「全国伝統的工芸品仏壇仏具展」における出品本数は二回とも群を抜く本数であり、伝統的工芸品仏壇における三村松の存在感は高い。

時代の変化への対応では2006年に「立町本通り店(夢モダン)」、そして今春には「寺町モダン」をオープンさせ、現代人の生活スタイルに合わせたオリジナル仏壇の提案も行っている。

三村松は原爆により廃墟と化した広島にあって、広島市民、お寺様と一体となって復興の心を仏壇によって支えてきた。三村松が広島で市民に広く深く親しまれる理由がここにある。

戦後70周年という節目の今年、創業150周年を迎えたことは意義深いものがある。



会社設立(昭和33年頃) 三村松の店頭